2020.7.

2020年上半期、本・映画で記憶に残る作品

１、　　「忘れられた軍隊」（アマゾンプライムビデオ　The forgotten Army）

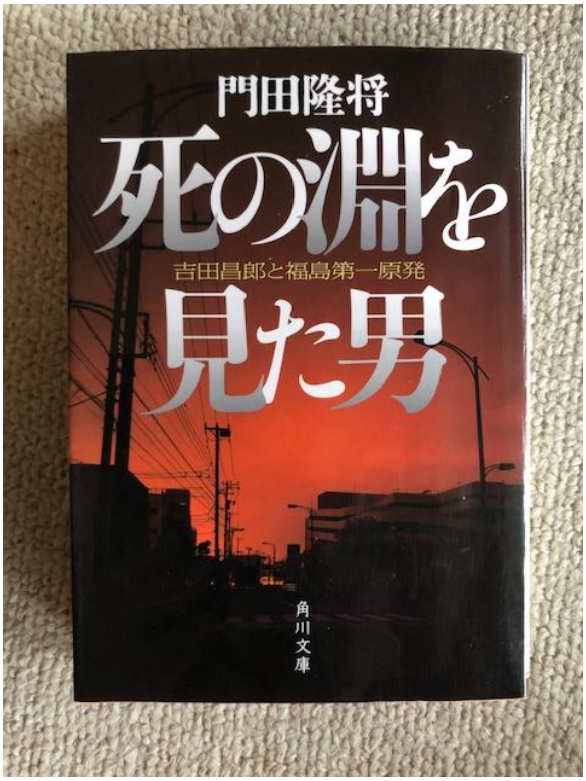
この映画はアマゾンプライムで１月から同社独自作品として放映された。タイトルに興味を惹かれシリーズをｂビデオ鑑賞したところ、シンガポールとミャンマー（インパール作戦）を舞台に１９４０年末から展開したインド独立戦争を描いた史実をベースにしたものだった。

インパール作戦は大東亜戦争の中で日本軍最悪の戦闘程の知識しかなかったが、この動画を見てインド独立戦争と不可分あったことが分かった。さらにこの戦争が１７世紀以来植民地として苦しんできた東南アジア諸国の国民に希望の光を与えたことも分かった。この動画を契機に以下の書籍を読み東南アジア近現代史について多くの知見を得た。

①　「インパールを越えて　Ｆ機関とチャンドラボースの夢」　国塚一乗著
（マンガ「インドの嵐」としても描かれている）

②　「Ｆ機関」　藤原岩市著

③　「ビルマの夜明け」バーモウ著　横堀洋一訳



２、「フクシマフィフティ」（映画）　「死の淵を見た男」　門田隆将著

フクシマフィフティは福島原発事故をテーマにした今年２月上映の映画だ。門田隆将の著書がベースになっており、東北大震災の津波で電源が故障し、原子力発電所の復旧を巡る人間ドラマ（東電本社、官邸、発電所の人間）である。

3.11 の事故発生から１週間に福島で何が起きていたのか。リーダーと仲間たちの苦悩、奮闘、家族への思いなどが丁寧に描かれていて非常に感動的であった。

ただ発電所２号機が万一爆発していたら首都東京は放射能に汚染される危機があった。最後に奇跡？が起きて事なきを得たが、当時の政府と東電本社の対応（隠蔽体質）には問題が多い。映画では余り詳しく触れていなかったが、在京の外国大使館職員の多くは帰

国か大阪に移動した。震災当時勤務先にいた会社の中国人留学生は即帰国して日本に戻ることは無かった。海外メディアは東京汚染のリスクを相当流していたのだ。尚主役の渡辺謙や佐藤浩市の演技は見事だった。当時の民主党幹部は見たくない映画だろう。

３、　　「女帝　小池百合子」　石井妙子著

都知事選開幕前の６月１５日に購入した時には１５万部刷られていた。著者の石井妙子さんは２年前にも月刊文芸春秋で小池百合子の経歴疑惑記事を書いたが余り反響がなかったそうだ。しかし今回、小池の学歴詐称疑惑を幼少からの生涯を描くことでその真偽を読者に問うている。読者は容易に判断できると思われる（注：因みにカイロ大学は小池氏の卒業を何度も公表し認めている。卒業証書も不明確ながら公表している）

芦屋に生まれた幼少期の境遇からカイロでの５年間が人生にどんな影響を与えたか。カイロ大学卒という看板を最大限利用しマスコミと政界を駆け巡っていく姿は壮観だ。男社会への挑戦でもあったように思える。我が国を代表する有力な政治家が、上手に操られているかのようにさえ見える。最後に小池物語に登場する政治家とメディアはこれまで、彼女の実態と素顔に甘い評価をしてきたと痛烈に批判している。石井妙子氏はプロのノンフィクションライターであり勇気ある女性である。

４、　　「フィナンシャル思考」　朝倉祐介著

著者は、フィナンシャル思考に対峙するのが「PL 思考」だという。売上−費用=利益という短期的で単純な思考の限界を解かりやすく解説している。

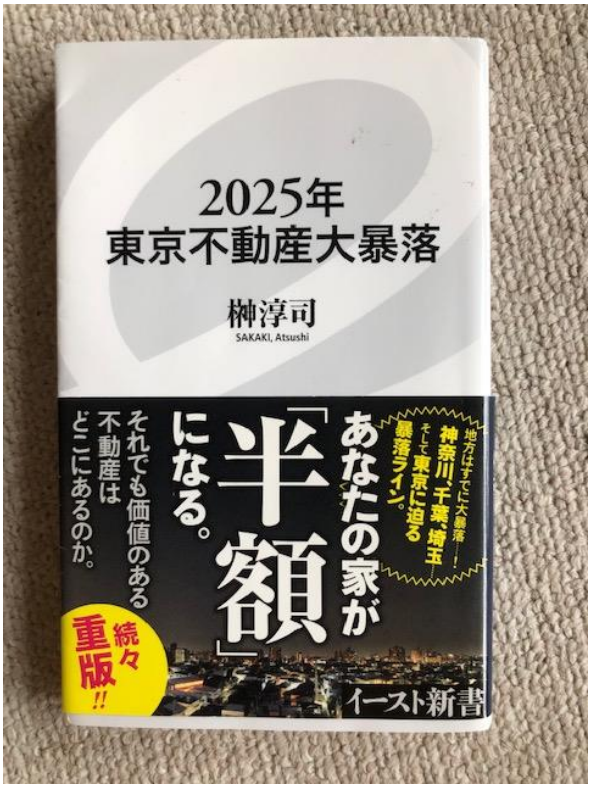
会計知識は過去の業績を理解する上で不可欠で重要な知見であるが、未来予測するには不十分で、当然ながら事業内容、経営者、環境変化など多面的な情報分析が必要だ。当たり前のことだが忘れがちな知識を経営者と投資家向けに解説した参考書である。

５、　　「あきらめない」　村木厚子著

「食べて眠れば人生なんとかなる」　村木厚子さんが 164 日の勾留生活を綴った本の一節である。2010 年 9 月 10 日村木さんは無罪判決を勝ち取った。

同じ日に日本振興銀行は民事再生法を申請した。日本で唯一預金が１００％戻らなかった銀行（ペイオフ）の倒産である。この銀行に 2011 年 8 月に再生請負人として入社した。民事再生後の３か月は超多忙で体調を崩したことがあった。その時この本に出会い、病気にだけはなるまいと頑張れた。救いの本である。

６、「２０２５年東京不動産大暴落」　榊　淳司著



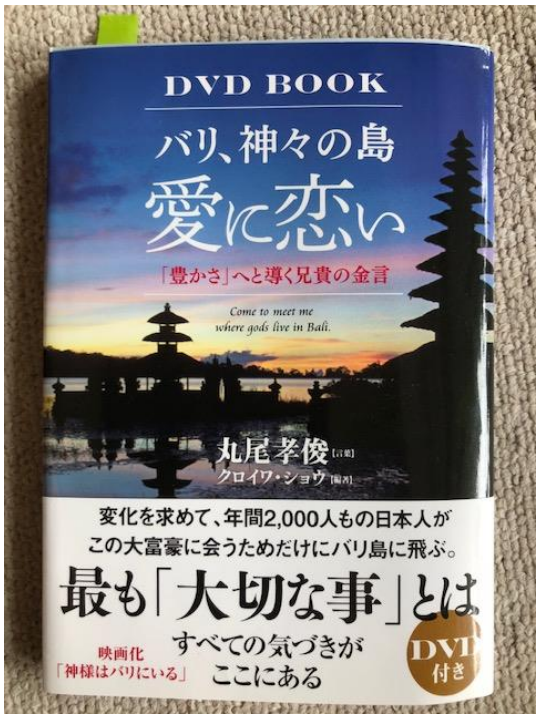
コロナ禍で東京オリンピック・パラリンピックが延期された。そして２０１７年からの米中貿易戦争と重なって２０２０年の世界経済は戦後最悪の様相を呈しつつある。株価は早々に反応し暴落した。不動産価格の下落も時間の問題である。

この本は２０１７年出版で、著者は不動産価値とは利用価値であるとの確信から、東京と日本の近未来を展望している。

軽井沢スキー場にバブル期に建設された住居は戸建１０万円でも売れないそうだ。日本には９００万超の空き家もある。不動産価格が上がる地域は極めて一部の場所であることを肝に念じて資産を守りたい。

７、「バリ、神々の島　愛に恋い」丸尾孝俊著

インドネシアのリゾート地で有名なバリ島にアニキと呼ばれる日本人が住んでいる。「神様はバリにいる」という映画も２０１４年に上映されている。主演は堤真一であった。

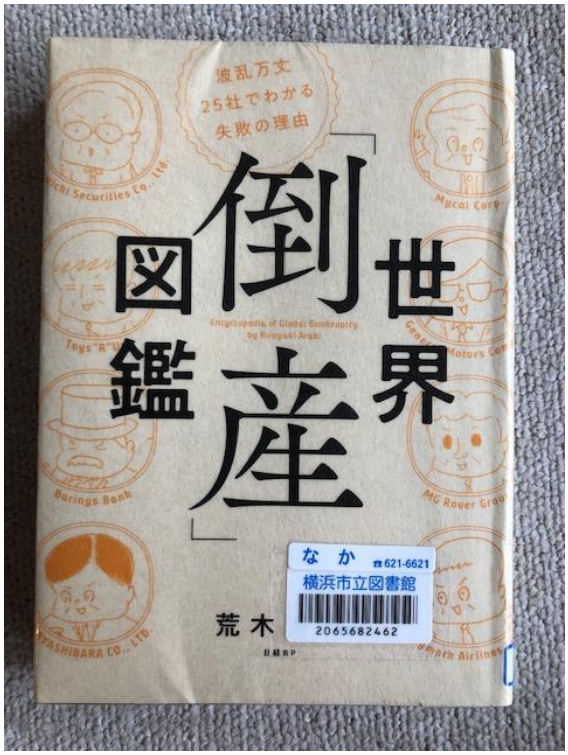


この本は主人公であるアニキの人生観を纏めたものだ。DVD もついているのでバリでどんな生活をしているかも大凡わかる。

アニキの人生観が古き良き日本にある道徳観を基盤にしているようだ。戦後の日本で失われた道徳や倫理についての言葉が美しく素晴らしい。「他人は鏡」「失敗した時ほど笑え」「仕事をかけもつ」「先人を敬え」などなどだ。

尚大富豪になるまでの武勇伝や成功哲学の解説本は１０数冊ある。

８、世界「倒産」図鑑　荒木博行著

著者は、グロービス大学院の副研究科長を経て株式会社学びデザインの代表取締役社長である。２０１９年の出版で有名な企業２５社の倒産事例を分析している。倒産の類型を、戦略上の問題（「過去の亡霊型」「脆弱シナリオ型」）とマネジメントの問題（「焦りからの逸脱型」、「大雑把型」、「機能不全型」）に分けて非常に解かりやすく失敗の背景・原因・教訓を纏めている。２５社の中では、そごう、鈴木商店、リーマンブラザーズ、NOVA、林原が印象に残った。

過去３０年近く倒産事例解説本を何冊か読んできたがこの本がベストである。それまでの倒産事例解説本を断捨離した。